

コロナ禍の高等教育における オンライン学習支援

岩 崎 千 晶*

Online Learning Support in Higher Education during COVID-19

IWASAKI Chiaki

Abstract:

Due to COVID-19, universities hurriedly implemented online classes in 2020. Online learning support was also implemented, and currently learning support is being offered both online and face to face.

This paper will discuss online learning support efforts in higher education during the COVID-19 pandemic, discuss the effects and resulting challenges, and make recommendations for future learning support.

キーワード： 学習支援、オンラインチュータリング、チューター、ラーニングアシスタント、ティーチングアシスタント、高等教育

1. はじめに

2020 年は COVID-19 (以下コロナ) により、大学教員は十分な準備期間もなくオンライン授業を急遽開始することになった。同様に学生もオンライン授業を受けることを余儀なくされた。2020 年 4 月の段階では自宅でオンライン授業をしたり、受講したりする ICT 環境が十分に整っていた教員や学生は限られていたと考えられる。しかし、大学の支援によって ICT 環境が段階的に整備されていったこともあり、現在はオンライン授業と対面授業の両方が実施されている。この状況は大学の正課である授業に限ったことではない。大学には正課の取り組みを支援する様々な学習支援が展開さ

* 関西大学 教育推進部 准教授

れている。学習支援は、TAやLAが授業内に入って学習支援を行う正課内での学習支援や、レポートや卒論等に関して相談ができるライティングセンターや外国語学習支援等の授業外に行われる正課外の学習支援が挙げられる。これら学習支援の取り組みも、授業と同様にオンラインでの活動が求められ、実施されるようになった。本稿では、コロナ禍の高等教育におけるオンラインでの学習支援の取り組みや効果や課題、学習支援スタッフの育成等を取り上げ、今後の学習支援に関する配慮すべき点について論じる。

2. 大学教育における学習支援導入の背景と学習支援の現状

コロナに代表されるように、現代社会は予期せぬことが起こるリスク社会となっている。リスク社会では、問題の所在が明確ではない場合も多いため、問題を発見し、他者と共に問題を解決し、その活動を反省的にふりかえる能力が求められている。こうした能力を育むためにも、大学はアクティブラーニングを導入し、学生が自らの考えを述べる機会を授業で設けたり、学生同士で意見交換をする機会を取り入れたりすることなどを推進している。そして、学生同士が意見交換やグループワークを円滑に行えるように、ファシリテーターとしてティーチングアシスタントやラーニングアシスタントといった学生スタッフを導入する活動が学習支援の一環として実施されている。またアクティブラーニングでは学生が授業外においても学びに従事することが求められるため、ラーニングコモンズのように、学生同士が授業外に学び合うことができる施設を大学が整備したり、授業外においても学生が自律的に学ぶことを支援するために、ライティングセンターを設けて学生の書く力を支援したりする学習支援を展開している。

コロナ禍においては対面授業の実施が困難な状況となり、対面での学習支援も従来通りに行うことができなくなったが、大学はオンラインでの学習支援に舵を切り始めた。遠海(2021)は、関西ラーニングコモンズ担当者ネットワークに加入している33大学を対象に、コロナ禍におけるラーニングコモンズの学習支援について調査を行っている(有効回答数17件)。調査の結果、コロナ禍前(2019年度)から対面のみの学習支援を実施して

いた 17 大学のうち、14 大学がコロナ禍においてオンラインでの学習支援を実施していたことが示されている。また岩崎 (2021) は、4 年制大学を対象にライティングセンターに関する調査を行い (有効回答数 205 件)、WRC を保有すると回答した 55 大学のうち、41 大学 (74.5%) がオンラインでのライティング支援を行っていることを提示している。そのうち、37 大学 (90.2%) は、コロナ禍を機にオンラインでの学習支援を開始したことを示している。

このようにオンラインでの学習支援はコロナ禍を機に、その実施が増えていると言えよう。東北大学でも、従来は対面で行っていた学習支援をオンラインに切り替えて実施するようになった。縣ほか (2021) によると、理系科目の学習支援に関しては、利用学生とオンラインでホワイトボードのように利用できる Jamboard を活用し、Google Meet の画面共有の機能を活用しながら、学生との学習支援に応じていた。そのほか、ライティング、英会話、日本語会話等を扱った学習支援もオンラインで提供している。

また、京都産業大学においても、ラーニングコモンズにおける学習支援員が大学での学びに対し学習者が興味関心を持続できることを目指して、ラーニングコモンズの紹介や、大学と高校の学びの違いをテーマとした情報提供を 2020 年 4 月 10 日からオンラインで行っていた (川面・今橋、2021)。これらに加えて、学習に関する課題や疑問についてアドバイスをする個別相談をオンラインで行ったり、レポート作成に関するセミナーを提供したりしている。新学期が開始してすぐに、正課とは異なる正課外でのオンライン学習の機会が学習支援組織から提供されていることが分かる。

支援の対象は日本人学生だけではなく、留学生を対象とした学習支援も行われていた。留学生は、言語的な制約や情報収集に課題があり、孤独や不安を感じることが多い (村田、2021)。そこで留学生を支援するために、日本語や英語を用いた来日の見守りと情報提供、留学生の母語でのサポート、留学生と日本社会をつなぐ交流のサポート、進学や就職活動のサポートといった活動を日本人学生がオンラインで担う取り組みも実施されていた (村田、2021)。

次節では関西大学の全学的な学習支援の取り組みを事例に、具体的にどのようにオンラインでの学習支援が行われたのかについて述べていく。

3. オンラインでの学習支援

3.1. 正課における学習支援

関西大学では、初年次教育における学習支援として当該科目を履修済みの学部生をラーニングアシスタント (Learning Assistant: 以下 LA) として1クラス2～3名配置できる制度がある。LAが導入されている科目に共通教養科目として開講されている初年次教育「スタディスキルゼミ (プレゼンテーション) (定員 24 名)」がある。本科目では、学生が3～4名で1グループを作り、社会問題を取り上げ、調査分析をし、発表するという課題探究を通じたアカデミックスキルの育成を目標としている。身近な先輩である LA の活動に触れながら、初年次生は授業でグループワークでの議論の仕方や論証的なプレゼンテーションのつくり方を学んでいく。

LA は適切な学習支援活動を行えるように、学期開始前に教育開発支援センターによる LA 研修を受講する。研修では授業でのグループワークを想定したロールプレイ、学生の抱える課題や対応を話し合うファシリテーションのワークなどが行われている。また授業前には教員から LA に対して授業目標、学習内容や手順が提示されるが、LA 活動に逐一細かな指示はない。そのため、LA は学生の状況を見て自身の判断で活動している。

筆者はこの授業において Zoom を活用したリアルタイム型のオンライン授業を担当していたが、2000 年 4 月の 1、2 週目は全学完全休講であったため、ライティングラボが提供していたリアルタイム型のオンライン講座「初年次教育の心構え、ノートテイキング、問いを立てる、レポートの構成」を学生が視聴し、学んだことや考えたことを LMS の掲示板に投稿する課題を出した。こうすることで、3 週目から Zoom や LMS を活用して授業が受けられる力をつける準備の期間とした。

その後、オンライン授業が始まった際、Zoom のブレイクアウトルームを活用して、対面での授業と同様にグループでのプレゼンテーションを

行った。しかし、学生グループがブレイクアウトルームに分かれると、教員が各グループの様子を把握し、きめ細やかなサポートをすることが難しい状況があった。そこで、あらかじめグループワークが円滑に進むように、グループ内での役割分担、グループワークの進捗報告をするようにしていた。加えて、LAによる学習支援とLAとの情報交換を徹底した。

まず役割分担では、毎回の授業冒頭に「司会、書記、発表係、質問・発言係」をグループ内で決め、全員がグループワークに積極的に取り組めるようにした。書記はグループで実施したことをLMSの掲示板に投稿し、発表係はグループでの実施したことや来週までにすること（宿題）を口頭で報告し、これらの報告を教員とLAで共有するようにした。

また、グループの様子やグループワークの進捗を把握し、適切な指導をするために、教員とLAは全グループのブレイクアウトルームに参加し、毎回学生と話すことを心掛けた。授業当初はLAと学生との関係性が十分にできておらず、ブレイクアウトルームに参加すると、緊張して発言できない学生もいた。しかし、学生が安心して話し合えるよう、LAが学生への声掛けに配慮すると、リラックスしてグループワークに参加できる学生が増えていたことが見受けられた。

複数のグループから教員に声がかかり、すぐにグループの指導対応ができない場合は、LAが先にグループの質問に対応し、教員がLAと協力しながら各グループをサポートすることができた。中には活動に課題を抱えているにも関わらず、教員やLAへの援助要請をしないグループもあるが、LAは全グループの様子を観察し、必要であれば助言や質問をし、グループの活動状況や、教員の支援が必要なグループを迅速に教員に伝えることをしていた。このようなLAの活動を通して、教員はオンライン授業でのグループワークにおいても、グループ全体やグループの各学生の様子をより具体的に把握でき、学生へのきめ細かいサポートへとつなげることができた。

3.2. 正課外におけるライティングセンターの学習支援

関西大学は学習者の書く力を育むためにライティングセンター（正式名

称はライティングラボ、以下 WRC と略す) を開設している。WRC は学習支援を担う組織で、主に①訓練を受けた博士課程や PD のチューターがレポート作成やプレゼンテーションの個別相談に対応すること(1回40分)、②アカデミックスキルに関するワンポイントセミナーを実施すること、③大学の授業にライティングに関する出張講義をすること、を行っている。

2020年春学期は完全休講となった1、2週目においても学生が学び続けられるように4月6日から16日までZoomでのアカデミックスキルを学ぶワンポイント講座(講師: 多田泰紘、藤田里実、岩崎千晶)を提供した。WRCは毎日30分の講義を配信し、合計して23回のセミナーを実施した(図4-1)。セミナーは学生の専門やニーズに合わせるために、3つのコースを設けた。1つ目は1、2年生向けのノートテイキング、レポートライティング、プレゼンテーションを扱ったコースとした。2つ目が理工系学生向けの実験ノートやレポートの書き方に関するコースとした。3つ目が3、4年生向けの卒論執筆や発表に関するコースである。それぞれの学年や専攻にあわせたワンポイント講座をZoomで配信することで、「学びを止めない」環境を構築した。また、オンライン授業が始まったときに学生がスムーズに授業を受講できるようにZoomでの学習に慣れておくこともねらいとした。教員が本セミナーを閲覧し、Zoomでのオンライン授業のイメージを持つという目的もあった。

加えて、「レポートの書き方ガイド」「アカデミックライティングを学ぶeラーニング教材」を開発していたため、これらの教材を自主学習として活用できることも学生に伝えた。さらに、4月3週目以降にオンライン授業が開始する段階では、Zoomや関大LMSの操作方法を扱うセミナーを実施したり、図書館を使えない状況を考慮し自宅から図書館サービスを利用する方法に関するセミナーを実施したりした(講師: 三浦真琴、藤田里実)。

WRCではコロナ禍前からオンラインでのチュータリングを実施していたため、個別相談に関しては継続してオンラインでのチュータリングを即時に実施できた。また、ワンポイントセミナーもリアルタイム型として配信し、その後オンデマンド型としていつでも学生が視聴できるようにし

コロナ禍の高等教育におけるオンライン学習支援

図1 アカデミックスキルのワンポイント講座

Zoomで学ぶ ワンポイント講座

自宅のPCやタブレットを使って視聴できます！


申込不要 自由参加

視聴方法

- 開始時間に、視聴したいテーマのURLをクリックするか入力する
- Zoomのサイトへ移動するので、サインインする

初めてZoomを利用する場合は、Zoomのアカウントを新しく取得する(右図①)か、Google、もしくはFacebookアカウントを連携する(右図②)

*事前の取得・連携を推奨



Zoomで学ぶ ワンポイント講座

自宅のPCやタブレットを使って視聴できます！

申込不要 自由参加

理工系1年生向け *16日10:30～のURLを正しいものに修正しました

1	口頭発表の方法	4月9日(金) 11:30-12:00	
2	スライド資料の作り方	4月10日(金) 13:00-13:30	https://us04web.zoom.us/j/322810750
3	実験レポートの書き方	4月13日(月) 13:00-13:30	
4	実験レポートの書き方① 章をよりよくするために	4月14日(火) 13:00-13:30	
5	ライティングラボの活用一文章をよりよくするために	4月16日(木) 10:30-11:00	https://zoom.us/j/830280572
6	実験レポートの書き方②	4月16日(木) 13:00-13:30	https://us04web.zoom.us/j/322810750

3、4年生向け *16日のURLを正しいものに修正しました

1	卒論執筆の予定を立てよう	4月6日(月) 11:30-12:00	
2	卒論のテーマを考えよう	4月7日(火) 11:30-12:00	
3	卒論のアウトラインを作る	4月8日(水) 11:30-12:00	https://us04web.zoom.us/j/322810750
4	卒業論文の書き方	4月9日(金) 11:30-12:00	
5	口頭発表の方法	4月10日(金) 11:30-12:00	
6	スライド資料の作り方	4月10日(金) 13:00-13:30	
7	ライティングラボの活用一文章をよりよくするために	4月16日(木) 10:30-11:00	https://zoom.us/j/830280572

後日、関西大学講義前座システムで講義動画を配信する予定です。詳細に関しては、下記ライティングラボのWEBサイトをご覧ください。

図2 アカデミックライティングに関するeラーニング教材

ライティングラボからのお知らせ 授業内で活用できる動画資料を関大LMSで公開中!!

コース名「ライティング力を磨いて、いいレポート・卒論を書こう!」
(アドレス: 検索URL) <https://lms.kansai-u.ac.jp/> → 右「メニュー」ボタン → 上記へ入るメニューからこちらをクリック

レッスンID	テーマ	各1～10分収録
1	レポートライティングの心構え	・ 書き始める前の準備について説明する ・ レポート執筆のための留意点をまとめる
2	文章を書くにはどうしたらいいの?	・ 書く前に読むべきことについて説明する ・ レポートを書く上で、いかに読み手である教員と向き合えるかを説明する
3	種別も種類もレポートと論文構成	・ レポートの種類や構成について説明する ・ 論文の種類や構成について説明する
4	レポートの書き方「性質」他の書きものの違い	・ レポートと他の書き物の違いを説明する
5	レポートの「アブタ」	・ レポートの各部分の構成について説明する
6	ライティングラボで行うこと①	・ ライティングラボでできることについて説明する
1	レポートに必要な資料探し①	・ 資料の探しに必要な事前準備を説明する
2	引用・参考文献の書き方	・ 引用の適切な方法について説明する ・ 脚注について説明する。脚注がない場合でも適切な引用方法があることを示す
3	参考文献の書き方	・ 参考文献の書き方について説明し、著作物の種類ごとに参考文献の書き方について説明する
4	実験レポートの書き方	・ 実験レポートの書き方について説明する
5	レポートの構成(表紙・目録)を作る	・ 文庫集を説明する方法を説明する
6	レポートの構成(表紙・目録)を確認	・ クリアフォントの書き方とフォントの入れ方を説明する
7	レポートの構成(表紙・目録)を確認	・ テキストの構成要素と見出しの付け方を説明する
8	レポートのアウトラインを作る	・ アウトラインの書き方と方法を説明する
9	レポートのライティング形式で書くこと	・ バックグラウンドの書き方を説明する
1	種別も種類もレポートと論文構成(1-1)目的	・ レポートの種類や構成について説明する ・ 論文の種類や構成について説明する ・ 書き始める前の準備について説明する ・ 読み手である教員と向き合えるかを説明する
2	種別も種類もレポートと論文構成(2-2)書き方	・ レポートの種類や構成について説明する ・ 論文の種類や構成について説明する ・ 書き始める前の準備について説明する ・ 読み手である教員と向き合えるかを説明する
3	種別も種類もレポートと論文構成(3-3)構成	・ レポートの種類や構成について説明する ・ 論文の種類や構成について説明する ・ 書き始める前の準備について説明する ・ 読み手である教員と向き合えるかを説明する
4	種別も種類もレポートと論文構成(4-4)アブタ	・ レポートの種類や構成について説明する ・ 論文の種類や構成について説明する ・ 書き始める前の準備について説明する ・ 読み手である教員と向き合えるかを説明する
5	種別も種類もレポートと論文構成(5-5)参考文献	・ レポートの種類や構成について説明する ・ 論文の種類や構成について説明する ・ 書き始める前の準備について説明する ・ 読み手である教員と向き合えるかを説明する
6	種別も種類もレポートと論文構成(6-6)構成	・ レポートの種類や構成について説明する ・ 論文の種類や構成について説明する ・ 書き始める前の準備について説明する ・ 読み手である教員と向き合えるかを説明する
7	種別も種類もレポートと論文構成(7-7)構成	・ レポートの種類や構成について説明する ・ 論文の種類や構成について説明する ・ 書き始める前の準備について説明する ・ 読み手である教員と向き合えるかを説明する
8	種別も種類もレポートと論文構成(8-8)構成	・ レポートの種類や構成について説明する ・ 論文の種類や構成について説明する ・ 書き始める前の準備について説明する ・ 読み手である教員と向き合えるかを説明する
9	種別も種類もレポートと論文構成(9-9)構成	・ レポートの種類や構成について説明する ・ 論文の種類や構成について説明する ・ 書き始める前の準備について説明する ・ 読み手である教員と向き合えるかを説明する
10	種別も種類もレポートと論文構成(10-10)構成	・ レポートの種類や構成について説明する ・ 論文の種類や構成について説明する ・ 書き始める前の準備について説明する ・ 読み手である教員と向き合えるかを説明する

た。出張講座に関しても、各学部や担当教員からのニーズに対応できるようにオンラインで実施した。いずれの場合も、教員や学生のニーズに合わせて柔軟に対応するように心がけた。

3.3. 学生生活における学習支援：ピアによるオンライン相談

学生は大学で授業を受けるだけでなく、課外での活動を含めた大学生生活を過ごしている。オンライン授業では授業に関連する質問を教員に尋ねることはできるが、学生生活全般に関する質問を訊く機会は十分にない状態であった。そこで教育開発支援センター事務局は、授業支援 SA (Student Assistant、以下 SA) によるオンライン相談を実施した。毎日 20 件程度メールにて寄せられる質問に対して、先輩学生である SA が回答し、職員がその回答内容を確認したうえで学生に返信をするようにした。学生からは、システムに関する質問 (Zoom ではない授業でのシステムの使い方、遅刻して Zoom に入れなかったなど)、授業に関する質問 (レポートが多い、履修を変更したいなど)、学生生活 (教科書販売、奨学金など)、先輩学生への質問 (おすすめの授業、みんなと仲良くなれるサークル、学習方法) についての問い合わせが寄せられた。

大学生活は授業だけで完結するわけではなく、課外活動や友達と話し合うことなど、オンライン授業以外にもたくさんの学びがある。こうした学びの場を支えるために、教職員は学生同士がつながりを支えようとする支援を実施していた。

3.4. ハンディキャップのある学生に対する学習支援

関西大学学生相談・支援センターでは、従来から配慮が必要な学生に対する支援を行っていた。例えば聴覚障害がある学生に関しては、学生スタッフが同じ授業に参加し、講義内容を書き留め、学生が授業内容を理解できるように活動していた。コロナ禍において聴覚障害のある学生がリアルタイム型オンライン授業を受講する場合、日本聴覚障害学生高等教育支援ネットワーク遠隔情報保障システム「T-TAC Caption (ティータックキャプション)」を活用し、聴覚障害のある学生が教員の講義内容を文字

で読めるように配慮して授業が進められていた。遠隔情報保障システム「T-TAC Caption」は、国立大学法人筑波技術大学の三好茂樹教授が開発したもので、高等教育機関や初等中等教育機関で学ぶ聴覚障がいのある児童・生徒・学生のために遠隔地からの情報保障を円滑に実施することを目的に開発されている。

またオンデマンド型授業の場合は、学生相談・支援センターのスタッフが資料に書き起こしてPDF ファイルを提供していた。ほかにも YouTube の限定配信機能による授業では、自動字幕機能を活用したうえで、学生が読みやすいようにスタッフによる修正が行われていた。こうした支援は大学によって行われているものの、教員は聴覚障害のある学生のために、教員には紙の資料を作成することや講義映像を撮影する際に、口元が大きく映るようにするなど、多様な背景をもつ学生の状況に合わせた工夫をする必要があるといえる。

4. 学習支援の行為主体である学生スタッフの育成

従来TAやLAといった学生スタッフは対面授業における学習支援を担っているため、オンライン授業における学習支援の経験を持つ学生スタッフはほとんどいなかった。しかし、2020年春学期は学生スタッフもオンラインでの学習支援に取り組みざるを得なかった。学生スタッフが不安を抱えずに学習支援に取り組むために、大学はオンラインで活動する学生スタッフに対して研修を行ったり、学生スタッフからの不安や課題を受け止めたりする支援も求められると言えよう。

先述の通り、関西大学では初年次教育に当該科目を履修済みの学部生をLAとして導入している。対面授業の際は、LAはグループワークの様子を見て介入できたが、オンライン授業では各グループにおいてどんな躓きが起こっているのかがわかりにくいことや、カメラやマイクをオフにしている学生に気軽に話しかけにくいといった声が聞こえ始めた。そこで、2020年秋学期開始前のLA研修はオンライン授業における介入の工夫や課題について話し合う場を設けた。具体的には継続して勤務しているLAと秋学期から新しく勤務することになる新規LAが混在するグループに分かれて、

継続 LA はオンライン授業における LA 活動をふりかえり、やってよかったこと、課題だと思ったことについて意見を交わした。また新規 LA は、オンライン授業をふりかえり、LA にやってもらってよかったこと、課題だと思ったことについて意見を述べ合った。

その結果、「LA がいなくてもお互いに質問し合う環境を作ること」「グループ内に司会・議事などの役割を設ける」「ホスト制度を使って、あまり話していないグループと、たくさん話しているグループを見極める」「ブレイクアウトで行うことの指示を明確にする」などオンラインでの学習活動に効果がある意見が挙げられた。LA はオンラインにおいても、学生同士のグループワークを円滑に進められるように役割分担をすることや、ワークが進んでいないグループを見極めて、サポートしようとしている様子が見受けられた。

一方、課題としては「1つのグループの雰囲気しかわからなかった」「LA 同士のコミュニケーションが十分に取れなかった」「参加型の授業にも関わらず、Zoom ならではのカメラマイク共にオフの人への寄り添い方が難しかった」等が挙げられた。授業では、教室内の複数のグループの様子を確認できるが、リアルタイム型授業でブレイクアウトルームを利用した場合、各ブレイクアウトルームでは1つのグループの確認しかできない。そのため、従来の教室のように学生グループの様子を見渡して、介入が必要だと思われるグループを見出すことができずに苦勞をしている様子が見受けられた。また従来の授業では LA 同士でどのグループに介入をするのかや、グループの情報などを共有しやすい。一方、オンラインの場合は、LA 同士で気軽に意見交換をすることが難しい点も課題であったと言える。さらに、回線の問題もあり、カメラやマイクをオフにして授業に参加している学生にどのように介入していけばよいのかについて判断しきれなかったと挙げられた。

ほかにも、「沈黙時間の理解」「オンラインだと発言するタイミングが難しい」「LA が一方的に話しすぎた」等の意見もあった。対面で学生が沈黙した場合は、考えているのか、単に黙っているのかをペンの動きや雰囲気と比較的判断しやすい。オンラインで学生の様子が見えない場合は、沈黙

が何を意味するのかを理解することが困難であり、LAが話すタイミングを判断しきれず、学生の意見より先に話を始めてしまうということが課題として挙げられた。グループワークの主体はあくまでも学生であるため、学生の発言を待って、LAは適宜発言するようにしているが、そうした判断が難しい状況があったことが示された。研修講師はこうした課題の解決について助言し、LAが円滑に活動にできるようにしたり、担当教員とLAで話をして、解決策を見出したりすることが求められる。

5. オンライン学習支援における配慮

コロナ禍では、様々な大学が従来から実施していた学習支援をオンラインで提供したり、コロナ禍で浮かび上がった課題を解決するために、新たにオンラインでの学習支援を展開したりし、学習者の学びを促進する活動を実施していることが見受けられた。これらの取り組みをもとに、今後の学習支援に関する配慮すべき点を提示したい。

従来は対面での学習支援が中心であったが、今後は多くの大学がオンラインと対面の併用で学習支援を実施していくことになるであろう。オンラインで学習支援を行うことで、複数のキャンパスの学生への支援ができ、学生が場所にこだわらずに支援が受けられることも魅力的であろう。就職活動や教育実習で大学の外にいる場合も、必要に応じて学習支援を受ける環境がオンラインにより整備できたと言える。

その一方で、オンラインで学習支援をする際に、支援をする学生の表情、学生がペンをもって書き込む様子やレポートを見ている様子がオンラインではわかりにくいため、対面で当たり前のように得られていた学生の情報が抜け落ちてしまう可能性もある。学生の理解度を把握することは学習支援では重要なことであるが、オンラインでは対面と同様に得られる情報が少ない分、口頭で学習者に質問をして補うなどの方略が求められることになるだろう。学習支援に携わるスタッフには、オンラインでの学習支援に応じた適切な研修を大学側が提供したり、相談できる窓口を用意したりして、支援に携わるスタッフが安心して学習支援に取り組むことができるようにする必要がある。

また、現在の学習支援は、ライティングを扱う学習支援、TA・LAを配置する学習支援など、学習支援の内容によって各組織がその運営を担い、それぞれの学習支援の目標を設定していることが多い。学習支援を担う組織は図書館やラーニングcommonsなど学部とは異なる組織であることが多いため、授業とは切り離された形で学習支援が実施されることも多い。しかし学習支援は授業と連動して実施することでより効果が期待されることも指摘されている(Tinto, 2004)。今後は大学や学部のディプロマポリシーやカリキュラムポリシーなどの各大学の方針や特色に応じて、正課の授業に加えて、どのような学習支援を提供する必要があるのかを大学全体で検討する時期に来ているといえる。

参考文献

- 縣拓充・中島啓貴・佐藤智子・芳賀満(2021)「学習支援センターにおけるオンライン学習支援システムの構築—新型コロナウイルス感染拡大への対策として—」『東北大学高度教養教育・学生支援機構紀要』7号、109-121頁
- 岩崎千晶(2021)「ライティングセンターにおけるオンラインチュータリングを考える」『大学教育学会2021年度課題研究集会要旨集』35頁
- 遠海友紀(2021)「コロナ禍の学習支援環境に関する調査について」『大学教育学会2021年度課題研究集会要旨集』34頁
- 川面なほ・今橋裕(2021)「ラーニングcommonsにおけるオンライン学習支援の試み」『高等教育フォーラム』11号、59-65頁
- 村田晶子(2021)「孤立する留学生のオンライン学習支援とソーシャルサポート：コロナ禍でのボランティア学生の取り組み」『多文化社会と言語教育』1号、14-29頁
- Tinto, V. (2004) Student Retention and Graduation: Facing the Truth, Living with the Consequences. *Pell Institute for the Study of Opportunity in Higher Education*, Occasional Paper 1, pp.3-15.

付記

関西大学で学習支援に取り組む教職員、学生スタッフに深謝する。本論文はJSPS科研費JP19K03040, JP19H0171, JP20K03100の助成を受けている。